

令和4年7月18日

南の風 For Junior98

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

97号の続きになります。

③のボールマンをミドルに誘導（ノーライン）することについてです。パックラインディフェンスでは、ボールマンを内側へ、内側へ行かせるようにします。この考え方がシェルディフェンスとの違いです。最近の考え方である、ラインやコーナーに追い込む（パスのコースを限定することや、ラインはディフェンスの味方という発想）のとは真逆になります。なぜなら、内側にはヘルプやカバーする味方が多いという発想なのです。ドライブに対して、ヘルプ、フィル、リカバーして小さく、小さく守ってゴール下やドリブルシュートを絶対にさせない守り方になります。

パックラインディフェンスの大事な約束として、「5つのポイントは死守する」というのがあります。5つのポイントとは、両エルボー、プラグ（フリースローの中心点）、両ニュートラルゾーン（ブロックと呼ぶ）です。この5つの地点は、ボールを通過させてはいけない場所です。ドリブルでの侵入、ポストアップからのパスインを絶対阻止しなければいけません。理由はこの5つの地点を攻められると、得点の確率が大幅にアップするからです。

ですから他の場所ボールを回すようにして、クローズアウトしてキャッチ&シュートはさせずに、無理やりドリブルからのジャンプシュートで終わらせるように仕向けるのです。

次にパックラインディフェンスの留意点を書きます。

一つ目は U15 の育成年代では、2線のオープンディナイやヘルプポジションがゾーンに見なされやすいということです。ボールだけを注視して、ボールマンのプレーだけを止めようとすると、ゾーンの守り方になるので注意が必要です。自分が守る相手の動きを見てポジションを素早く変えなければなりません。また、ヘルプディフェンスをして、ドリブルを止めたとき、相手ボールマンがキックアウトしたときは、クローズアウトしてリカバーしないでその位置に留まると、ゾーンポジションと見なされるのでこちらも注意が必要です。マンツーマンコミッショナーに、誰にマッチアップしているかを明確にしなければならぬのです。

留意点の二つ目は、相手にリードされているときには使えないディフェンスだということです。負けていて、残り時間が少なくなったときには、パックラインで小さく守っていることはできません。プレスディフェンスは必ず準備しておく必要があります。いつでもボールプレッシャーに出て、ダブルチームやパスカットを狙えるディフェンスに切り替えられるようにしましょう。

最後になります。U15の育成年代では、外のシュートの確率が低いのでパックラインディフェンスは、戦術として有効であることは間違いありません。小さく守ってペイント付近を固めて、ドリブルシュートや、ゴール下シュートをさせないディフェンス形態は効果を発揮すると思います。

このパックラインディフェンスは、まだ3Pシュートが導入されていない時代には、主流のディフェンス形態でした。現在は3Pシュートの確率が高くなり、対応するのに難しい部分もありますが、取り組んでみる価値のあるディフェンスだと思います。